

空



2014・2

**SORA** 53号

大阪 田岡 千章

銃眼の三角四角鴟猛る

椎の実を降らせて神を眠らせぬ

石路を咲かせ不浄を結界す

小春日やマトチョーシカに三姉妹

夜半の冬家のどこやら電子音

兵庫 戸栗 末廣

祇王寺の別の寒さを出でにけり

天辺に城おき山の眠りけり

大鐘を撞いて枯山おどろかす

綿虫や鞍馬といふはここらより

水洩や大きな橋が横たはり

福岡 山内 碧

海見むと来て素つ気なき冬の浜

冬ざれやドーベルマンに首輪なく

退院や一枚残る古曆

初鏡紅刷きこの世の顔となる

ゆつくりとバスを降りれば大枯野

粕屋 秋 千晴

足場組み大仏殿の煤払ひ

ひとつずつ螺髪の煤も払ひたる

煤竹の僧もよろめく長さかな

点検の仏師も混じる煤払ひ

老僧はひたすら読経煤籠

東京 山田 正子

丘の上屋根の数だけクリスマス  
ボロ市の輪ゴムで括るプロマイド  
職退きてセーターの首緩きかな  
冬鷗際立つ胸の白さかな  
幸せは日溜りに似て返り花

東京 今井 春生

咲きたくて咲ききれなくて冬の薔薇  
新米にちりめん山椒それでよし  
ぽんぽん船たんかんみかん積み込んで  
冬夕焼ぽんぽん船が連れてくる  
落日やしばしみかんの色残り

東京 古川 夏子

弘法市伊万里の藍の時雨けり  
市果てて闇の方丈枯木星  
三の酉月をさがして帰りけり  
終焉は胎動なるや大枯野  
命日となりし朝の冬薔薇

福岡 田代 貞枝

光溜る枝に雀や初景色  
元旦や向きのととのふ男下駄  
獅子舞の巡る境内子ら群れて  
真つ新の御神符棚にお元日  
たまはりし時を大事に初日記

千葉 原 友 子

真つ直に向き合つてゐる初日かな

色の数間仕切りの数節料理

嫁姑口尖らせて葛湯吹く

初場所の差し違へたる行司かな

繭玉の影のまどろむ母の部屋



・ 第三回 「空賞」 受賞作品 ・

夢の世 宮井 知英

秋暑し骨の髄まで診る機械

纏ひしは夕日のみなり曼珠沙華

金木犀人に懐かぬ鶏飼うて

世を捨てし如く病みをり葛嵐

鬼の子の百も下がれば総毛立つ

鴉の贅昼も仰臥の眼の端に

十三夜術後の身内透きとほり

鶏小屋に日矢の射し入る冬はじめ

諦めも生きる手立や木の葉髪

霜晴や膨れ切つたる鶏の胸

神々は寢息を立てず冬の山

牡丹鍋勇者の如く囲みたる

着ぶくれて夫と互角に言ひ合へり

一臼は紅粉を入れて年の餅

初湯せり経木のやうな身になりて

大寒や乾坤一擲癌治療

鳥けもの容れたる山の凍りけり

風花に触れし神馬の長睫

指に腹手に腹日脚伸びにけり

紅梅の雨の雫は桃色に

遺品みな母の匂ひや春夕べ

春昼や白一色の手術室

臥すままの食事にも慣れ弥生尽

春の風病み抜きし身の軽さかな

山桃の粗朶の中より巢立ちけり

朧かな無くせしものも得しものも

木葉木菟女身捨てても生きよとや

羽抜鶏誰彼なしに飛びかかる

融通の利かぬ男や立葵

夢の世の蓮は音立て開きけり

空作品抄  
柴田佐知子抽出

寒明くる雲つきぬけて山のあり

気の強き鶏の生みたる寒卵

飯の世を生きる海鼠もわたくしも

年忘れ論客にして恐妻家

遍路杖納めし山の眠りけり

身を立つる芸ひとつ無し桐一葉

微笑仏に微笑を返し冬あたたか

引き抜かれ脚長くなる案山子かな

一湾を押し渡りゆく時雨かな

日に三度煮炊きのにほひ冬籠

水音の路地の奥まで暮の秋

百刃柿百箇を剥きて柿大尽

綿虫の空気に粘りありにけり

高倉和子

中田みなみ

荒井千佐代

服部早苗

柴田志津子

だいじみどり

野上杏

長憲一

吉村摂護

小林朱夏

松田明子

野畑さゆり

鳳 蛮華



太陽に消ゆる彗星冬ざるる  
寒鯉が胴の透くまで口開く  
引越の跡りんりと冬薔薇  
海原をせり上がり来る宝舟  
国民と人を括りて虎落笛  
獵犬のあととは寝てゐるだけと云ふ  
歩けない苛立ちに似て霰かな  
新米にかけし玉子も光りけり  
一太刀に逝きたる武士や冬の鴟  
銃眼の三角四角鴟猛る  
祇王寺の別の寒さを出でにけり  
初鏡紅刷きこの世の顔となる  
煤竹の僧もよろめく長さかな  
終焉は胎動なるや大枯野  
元旦や向きのととのふ男下駄  
雪催ひ打たれて匂ふ五寸釘

苑 実 耶  
矢野百合子  
井浦美佐子  
あさなが捷  
亀井紀子  
栗原京子  
高倉恵美子  
青木朋子  
樋口みのぶ  
田岡千章  
戸栗末廣  
山内 碧  
秋 千 晴  
古川夏子  
田代貞枝  
原 友 子

花嫁の整ふ一間寒紅梅

黒髪の覆ひ被さる大試験

黴拭ふ頑固な黴の字を思ひ

懸想文購ふ方も顔かくし

預りし赤子の眠る白障子

野良猫の野生となれずクリスマス

行きちがふバス窓ごしの御慶かな

何ごともうべなふ色に石露咲ける

クリスマスまづ街にきて村にくる

暫し見とるる数へ日の叩き売

絨毯を敷きて座敷の重くなる

退屈を至福としたり枇杷の花

一滴も子に触れさせぬ冬の雨

唄ひつつ園児のつくるクリスマスツリー

縫ひかけも編みかけもあり年つまる

一病も二病もありて冬至風呂

宮井知英

吉田 葎

長 節 子

湯 村 葉

戸 栗 末 廣

森 俊 人

織 田 高 暢

天 谷 翔 子

今 井 春 生

池 田 華 甲

白 水 良 子

田 岡 千 章

仲 里 奈 央

遠 山 の り 子

石 川 叔 子

酒 井 み ち 子



あちこちに家電のコード冬ぬくし

上席は話上手や日向ぼこ

鴨の音に醒め朝靄の城下町

ミサイルの飛んでくるかも日向ぼこ

大干潟貝のざわめき聞こえけり

悴みてやさしき人を遠くせり

ラジオから世界の気象クリスマス

顔見世や四条通りのにしんそば

冷えびえと庫裡の板間のあかり窓

枳盛も目計りもあり歳の暮

久々の子を待つてゐる干蒲団

吊し柿つぎつぎ風のうつりゆく

白樺の白を墓標に山眠る

境内の程よく暮るる実南天

実生の木すこやかに伸び初霞

年賀の子石ころ二つくれにけり

水鳥の河口に夕日集まれり

小川 涼

野畑さゆり

乾 有杏

えとう樹里

ふじの茜

押田裕見子

山田正子

清水量子

井手本恭子

伊東孝子

林 徹也

山口弘子

橋本知笑

田邊豊子

井上義郎

高見敏

松岡 凌

# 空集

## 柴田佐知子選

熊本 松田明子

名水で炊く父祖の地の今年米  
竇頭廬のそここ撫でて小春かな

河豚汁の濁りてきたる佳境かな  
千葉 原 友子

川底の窪みに竹釜落ち着かせ  
畑のもの納屋に吊して冬用意

攻めるより媚びる目付きの罌の猪  
新巻の骨のくれなゐ叩き切る

青空に鶴啼く声の混みあへり  
暮れ際へ万羽の鶴の啼き交はず

雪催ひ打たれて匂ふ五寸釘  
生かす石殺す石あり池普請

水張りし田毎の月の流れけり  
威銃遠慮会釈もなかりけり  
福岡 吉村摂護

竹馬の影白壁を発ちしまゝ  
住めさうな樹の洞見つけ葉掘

ばつたんこ響き英彦山尖りたる  
玄界に際立つ孤島冬を呼ぶ

騎馬戦の脚より潰れ鴟のこゑ  
福岡 柴田志津子

五百屯クレーンが吊る冬の雲  
何れゆく地獄極楽木の葉髪

見舞ひては見送られぬる小春かな  
泡ひとつ吐いて寒鯉それつきり

牡蠣割女吹きつ曝しの浜庇  
糸田 宮井知英

ほどほどと言ふはどこまで小鳥来る  
寒夜泣く子をもてあます大男

花嫁の整ふ一間寒紅梅  
思ひ出の真中の母や冬ぬくし

冬枯や切腹岩の前うしろ

夜火事見し列車に傘を忘れたり 中田みなみ

列車に乗っていたときに、車窓に火事を見たのであろう。しかも夜である。暗闇の中に、燃える炎の色のみが強調されて、それは衝撃的であつたことだろう。その反動が〈傘を忘れたり〉ということになる。傘という具体的なものを詠むことで、その情景と作者の心情を、ありありと、読み手は感じることができるとだ。

蘆刈の光をひろげつつ進む 宮井 知英

枯れきつた葦原に明るい日が降り注いでいる。刈り取りには絶好の日和。人の背よりも高い蘆を少しずつ刈り取ってゆく様子をへ光をひろげつつ進むととらえた。刈り取られる蘆は光を帯びて黄金色に輝いている。刈り取られ地面もまた、明るくまぶしい。

蓮の露落とさぬほどの風渡る 長 憲一

蓮沼に、あるかなきかの風が吹いているのだ。それをへ落とさぬほどのと描写したことで、蓮の葉に揺れる露の危うさをうまく伝えることができた。

一位の実昼はしづもる相撲部屋 苑 実耶

激しい朝の稽古が終わって、食事も終わり、今は昼寝の時か。相撲部屋には一時、静かな時が流れる。裏の物干しには、まわしが干されていたりするのだ。小さな一位の実は火種のように赤く美しい。それは関取を目指す若者の、夢の火種のようなのだ。小さくて丸い一位の実は、大きくて丸々太つたお相撲さんと対比も面白く、〈一位の實〉が一句によく生かされている。

ろうそくの焰よく伸び今朝の秋 矢野百合子

毎朝、仏壇のろうそくに火を灯し、線香をあげている作者。今朝のろうそくは、火をつけた時に、なぜか良く炎が伸びる。そうだ、今日は立秋だった。昨日とすこし違うさわやかな空気、ふと作者はそう感じたのだらう。

秋時雨看護師の語尾やはらかし 今井 春生

「どうしたの」「お大事にね」こうした看護師さんの言葉に慰められているのだらうか。これから寒い冬に向かう心細さ。弱った身に、雨も人も寄り添うようにやさしい。(以下略)